学園の歴史をつらぬく石桜精神

朝鮮戦争をきっかけにして立ち直った日本経済は、その後の昭和三十年代と四十年代を通じて、世界に例を見ない高度成長を続けた。実質国民総生産の年平均増加率を尺度にした場合、先進資本主義諸国が数パーセントの水準を保っていたときに、ひとりわが国だけが年々約一〇パーセントという並外れた実績をあげたのである。

高度成長の主役を演じたのは、民間大企業における設備投資の拡大であるが、その資金調達に関しては、もっぱら銀行からの借入金に頼るきわめて日本的な方式がとられた。同時に産業構造が変化して、急速に重化学工業化が進んだ点も見逃せない。産業界は競って海外から新技術を導入し、輸出競争力を強化した。また、戦後の諸改革によって、農民や勤労者層の所得水準が向上し、国内需要が拡大したことも、高度成長を支える大きな要因であった。

この高度成長は、よく指摘されるように、日本経済にさまざまなひずみをもたらした。大企業と中小企業、重化学工業と農林漁業の間に格差が生じ、恒常的な物価上昇を招き、さらには過密・過疎問題や公害問題などが深刻になってきた。しかしながら、高度成長によって、国民の生活水準が全般的に向上したことは事実であり、世界に対する発言力と影響力も、これまでになく強まったのである。

日本が経済の高度成長期に突入した昭和三十年ごろを境にして、本校の生徒の意識に、ある種の変化が生まれたことは確かである。〝質実剛健〟をモットーとする石桜精神に対して、あまり関心を示さない層がふえ、中には拒絶反応を示す者も出てきた。多くの家庭で生活についての不安がほぼ解消し、あまつさえ消費が美徳とされる時代が到来するに及んで、質実剛健の気風が一時色あせた過去の遺物のように感じられたのは、ある程度仕方がないことだったかも知れない。代って快楽主義・刹那主義が幅をきかすようになった。あるいは、生徒の間に緊張感が薄れ、無気力な風潮が芽生えはじめた。

学校長が佐々木哲郎から山中順三に変ったのは、そのようなきざしが見え出した昭和二十九年十月のことであった。山中新校長は、生徒の無気力化を防ぐために、ことあるごとに「石桜精神に還れ」「石桜精神に徹せよ」と呼びかけた。質実剛健の具体化として思い浮かぶのは、イギリスのパブリック・スクールが目標としてかかげるジェントルマンシップであり、ラグビー精神であった。すなわち岩手中・高等学校の生徒は、自制、義務に忠、約束厳守、公明正大、親切、慈善、作法・服装の正しさなどの態度を身につけたジェントルマンでなければならず、しかもねばり強いファイトの持主であるべきだというのが、山中校長の考え方だった。

山中新校長の誕生後間もない昭和三十年の夏に、野球部が宿願の甲子園入りを果たすという快挙をなしとげた。このできごとに、在校生や教職員はもちろん、父兄や卒業生を含む本校関係者全員が、血をわき立たせた。ことにも山中校長にとっては、練習場に恵まれないという悪条件下にありながら、野球部員が努力の積み重ねによってついに偉業を達成したのであってみれば、これこそ質実剛健の見本であり、石桜精神の発露であると思われた。

快挙といえば、戦後いちはやく対外試合で好成績をあげたのは、水泳部であった。ただ残念なことに、ホームプールを持たず、あちこちに出向いて練習する不便をしのんでいた。それが、三十年の九月に岩手高等学校プールが完成し、翌年の水泳シーズンから泳げるようになって、水泳部の黄金時代が現出した。また、一般の生徒にも開放されたので、本校の水泳水準が飛躍的に向上した。

活発な活動を展開したのは、野球部や水泳部だけではなかった。

石桜会の各運動部・文化部が、それぞれに実績を積み重ねて行ったのである。とくに戦前・戦中と違う点は、文化部が量的にも質的にも充実したことであった。戦前の文化部は、修養会と正語会（部）ぐらいのものだったが、昭和三十年代の前半には、弁論部・演劇部映画部・写真部・書道部・絵画部・英会話部・音楽部・生物部・化学部・物理部・地学部・郵便友の会・郷土研究クラブなどが出そろい、研修に励んでいた。その努力が実って、たとえば次のような入賞記録が生まれた。

すなわち、「石桜新聞」が、県下学生新聞コンクールで、二年連続して最優秀賞を受賞した（昭30・31）。生物部が、「イモリの発生」について発表し、第一回日本科学技術賞最優秀賞を受賞した（昭32）。演劇部が北海道東北学生放送劇コンクールに「牛」で参加して第一位となり、文部大臣賞と民放賞を受賞した（昭33）。英会話部員が各種英語弁論大会に出場して入賞した（昭34・35）。生物部が「早池峯の蘇類相についての研究」を発表し、読売科学賞優秀賞に輝いた（昭35）。絵画部員の作品「赤い塔」が、全日本学生美術展で特選を獲得した（昭40）。書道部員の作品が、大東文化大学主催の全国学生書道展で特選になった。演劇部の「三つのりんご」が全国ラジオ作品コンクール県予選で最優秀賞を受賞した（昭41）。吹奏楽部が、全日本吹奏楽コンクール岩手県大会で、Cクラス最優秀校に選ばれた（昭44）。同じく吹奏楽部が、全日本吹奏楽コンクール岩手県大会で、Bクラス最優秀校に選ばれた（昭47）。

このように、各部がめざましい活躍ぶりを示した原因のひとつとして、中学三年間、高校三年間の一貫教育体制を採用していたことをあげることができる。教師から生徒へ、先輩から後輩への指導を、じっくりと六年間も継続できる利点は大きかった。その結果、さまざまな分野で在校生の能力が開花し、学園は文字通りの雄躍期を迎えた。

しかし、六年間の一貫教育体制にも危機が訪れる。それは、岩手中学校への入学志願者数が、年々減少傾向をたどるという形をとって現れた。戦後の学制改革は、小学校の六年間と中学校の三年間を義務教育年限と定めたが、これが多数の公立新制中学を現出させ、結果的には私立中学の立場を苦しくさせたのである。さらに、終戦直後に生まれたいわゆるベビーブームの子どもたちが、昭和三十五年前後に中学へ進んだが、その後はしだいに人口動態も落ちつきを取り戻し、学齢人口が退潮を示すようになった。

生徒数の減少がいよいよ深刻な様相を呈したのは、昭和四十年代に入ってからである。学校側としては、中学の定員を減らして優秀な生徒だけを入学させ、思い切った英才教育を採用することにより、時代の潮流に対処しようとしたが、四十五年度には、ついに翌年度以後の中学生徒募集の停止に踏み切らざるを得なくなった。こうして、四十六年度から三年間にわたって、中学校の新入生が中断するという非常事態が生じた。

当然、伝統ある〝岩中〟の名前が消え去るのを惜しむ声が高まった。その気持をもっとも強く感じていたのは、おそらく三田義一理事長に外ならなかったであろう。六年間の一貫教育こそが本校の精神であるとの信念のもとに、岩中復活の構想が練られた。

たまたま昭和四十八年七月に、山中順三校長が病気のために退職し、遠藤貫中新校長が誕生した。三田理事長は遠藤校長と相談し、四十九年度から岩手中学校の生徒募集を再開することを決めた。前途に幾多の困難が予想されたけれども、全校が「石桜精神」の旗じるしをかかげて一致協力し、建学以来の伝統をさらに大きく雄飛させようとする姿勢をはっきりと打ち出した英断であった。

そしてついに昭和五十一年、本校は創立五十周年の記念すべきときを迎えた。三田義正翁の理想が岩手中学校という形に具体化されてから、ちょうど半世紀が経過した。その間時代はめまぐるしく変転したが、質実剛健を旨とする「石桜精神」だけは、学園の歴史をつらぬいて脈々として受け継がれ、絶えることがなかった。日本経済が高度成長期をくぐり抜けて安定成長期に突入したいま、「石桜精神」がますます輝きを増す時代になったことが痛感される。